平成19年度さきたま講座『考古学で学ぶ動物とのかかわり』

「古墳壁画に描かれた他界」

—動物・人物像を手掛かりとして—

嵐山史跡の博物館　若松　良一 氏

はじめに

本稿は平成19年12月22日に埼玉県立さきたま史跡の博物館において行った講演の内容に増補を加えて活字化したものである。

講演会では「古墳壁画の動物」と題して、古墳の壁画に見られる動物について講話をさせていただいたが、人物像を対象に加え、死者の他界について考察することに力点をおいて補ったので、その内容に沿った表題にあらためた。

1　動物の図像

(1)水鳥

線刻壁画の表現では種まで特定できるような鳥の絵は少ないが、描写の丁寧なものを挙げると、水鳥の特徴を示した例がある。茨城県幡横穴群では鷺(挿図1-1。以下「挿図」は略。)と鶴らしきもの、同県白河内古墳では首の長さが誇張された水鳥(1-3)、埼玉県地蔵塚古墳では冠毛の特徴から鷺と見うるもの(1-4)と嘴の特徴から鵜の可能性のあるもの(1-5)、千葉県長柄第13号横穴では7羽以上の水鳥側面図と2羽の鶏正面図(3-31)が、静岡県観音堂3号横穴では鶴の可能性のあるもの(1-6)、鳥取県空山古墳では鷺らしき鳥(1-7)、大分県鬼塚古墳では嘴の長い水鳥(1-8)が描かれている。

日下八光氏は被葬者の霊を鳥によって祖霊の国に導いてもらうという遺族の願いがこめられていたと考えたが、ヤマトタケルの伝承によって、霊魂が白鳥に化身したことを典拠とするものであろう。しかし、白鳥と種が特定できるような絵は意外なことにほとんどない。また鳥の飛翔する姿は福岡県五郎山古墳にみられる正面図(2-27)以外にほとんど例がない。これらの事実は日下説にとって不利な材料であるかもしれない。

金井塚良一氏は鳥と人間の生活とのかかわりの深さを追憶させる日常的な表現と理解した。鳥の描かれた場が水辺であることを示す長柄第13号横穴墓や地蔵塚古墳をテキストにすると、水辺という環境を示すことが日常的であったのか、特定の意味があったのかが議論の焦点となるように思われる。また、そこに描かれた水鳥が白鳥でなくとも、鷺や鶴のように神聖視される鳥の場合、特定の意味が付託されていた可能性は否定できないであろう。

(2)船にとまる鳥

北九州の彩色壁画には船に留まる鳥を描くものが数例みられる。福岡県珍敷塚古墳ではゴンドラ形の船の舳先に鳥(1-9)が、同県鳥船塚古墳では舳先と艫の両方に鳥(1-10)が、熊本県弁慶が穴古墳では船の中央部にドーム形の施設があり、その上に鳥(1-11上)が描かれている。これらのうち、珍敷塚古墳の場合のみ鳥の表現が丁寧である。首が短く頭の大きい鳥で嘴はさほど長くない。尾は短く、下に向いている。これだけの情報で種を特定することは困難であるが、鴟にも鳥にもみえる。彩色は赤であるが、鳥の色を反映したものではないであろう。

ところでこれらの船と鳥を組合せた絵画には記紀にみえる天鳥船伝承との関連性が説かれてい

る。天鳥船とは鳥に導かれて天界または冥界に導かれる船のことである。また、珍敷塚古墳の壁画(1-12)では向かって左端に鳥の留まる船が描かれ、その直上に太陽を表現した円文があり、右端に月を表現する蟇蛙が描かれていることによって、昼の世界から闇の世界へ向けて航行する船を描いているとする見方が広く知られている。闇の世界とは黄泉の世界のことであり、冥界である。

このような鳥を伴う船の絵は時期と分布が限られている。船を描く絵画は3世紀末とされる奈良県東殿塚古墳の鰭付円筒埴輪に描かれているが、それには鳥の姿はない。また、船の線刻壁画は神奈川県洗馬谷横穴墓群第2号墓(1-13)、埼玉県地蔵塚古墳(1-14)、茨城県幡バッケ横穴墓群第6号墓(1-15)、宮城県高岩18号横穴墓(1-16)など東日本にも少なくないが、鳥が舳先に留まる例はない。したがって、鳥を伴う船は北九州地方に限って6世紀中葉ころの時期に描かれた題材ということになろう。けれども東日本の船の絵がおしなべて違う性格を持っていたといいきることはできない。それは高岩18号横穴墓の船の舳先に衣蓋が描かれており、東殿塚古墳や唐古鍵遺跡出土の円筒埴輪に伴う絵画(1-17)と同様に、人物を描かずして高貴な身分の人物（またはその霊魂）を乗せる船であることを示しているためである。ただし、船の下方に多数描かれた珠文が夜または冥界を示すものかどうかは検討が必要であろう。

⑶顧みられてこなかった魚

壁画古墳における魚の図文は今まであまり取上げられたことがなかった。分布中心が北九州以外であることに起因しているかもしれない。例数の多いのは鳥取県で、梶山古墳には唯一の魚の彩色壁画がある。奥壁中央に主題として1mほどの大きさで描かれており、尾鰭以外の鰭を省略する簡略な表現となっている(1-18)。同県空山15号墳には背鰭、尾鰭、尻鰭を伴う長さ約0.2mの魚の線刻画(1-19)、同県鷺山古墳には長さが1.2mもありこの古墳の壁画の主題として位置づけられる魚の線刻画(1-20)があり、それには眼、口、背鰭、第2背鰭、胸鰭、尻鰭、尾鰭が皆具している。また、尾鰭の下方には長さ0.1m余りの小魚が描かれている。

他地域では、大阪府高井田横穴群第1支群12号横穴、佐賀県多久市天山1号墳、兵庫県高塚山9号墳、千葉県外部田谷横穴群(1-21)などに魚の線刻文が知られ、さらに神奈川県下の横穴墓にも魚の可能性のある簡略な図文が数例存在している。

魚の絵の意味合いに付いては、主題的に描かれている場合、折口信夫の研究を参酌して被葬者の霊魂が宿る魚を描いたのだという見解を提示する人もある。筆者は漁労風景を示す場合のあることや魚形埴輪の研究成果から、死者に供犠される魚が描かれたもので、猪鹿を供犠する山野の民に対して魚を供犠する海川の民があったことを想定している。

⑷馬

描かれ方によって、AからCの3つに分けて取扱う。

A　船に乗る馬

北部九州には馬を乗せた船の絵がある。熊本県弁慶が穴古墳では馬を乗せた船の上部に鳥の留まるドーム形の施設を伴う別の船が描かれている(1-11下)。柩の表現とする意見がある。このような表現は福岡県五郎山古墳の2艘の船にも認められ(2-27)、これらは長方形に描かれており、より柩に近い表現といえる。しかし、実際の柩は古墳に安置されていたはずであり、矛盾が生じることになる。筆者は霊魂を収めた箱を表現した可能性を考えており、弁慶が穴古墳のドーム形施設の中心部に描かれた珠文こそ霊魂を明示したものと推定している。この推論が正しいとすれば、霊魂を乗せた船に従う馬を乗せた船の性格は明瞭となろう。近年その発見例を増している馬の殉殺墓の研究成果を参照すれば、増田精一氏の説くように、主人とともに冥界に赴く馬を描いたものとみて差支えないであろう。

B　手綱を取られる馬

埼玉県地蔵塚古墳の線刻壁画では馬の頭部下方に描かれた烏帽子を付け靫を背負う武人の左手から直線が延びて、馬の頭部に向かっている。しかし、この直線は途中で途切れている。薄れてしまったものと理解した上で、この直線は手綱とみなされている。福島県泉崎４号横穴墓の彩色壁画では左側壁に口取りされる２頭の馬が連なって描かれている(2-23)。このうち後ろの馬には人が乗っている。その前方にも騎馬人物があるが、場面設定は不明である。冥界に導かれる馬、殉殺される前に曳き廻される馬などの特定解釈も可能であるが、状況証拠が明瞭でない現在、その描出意図を明らかにすることは困難である。

C　人の乗る馬

福岡県王塚古墳前室奥壁には左右対称形に４頭の人の乗る馬が描かれ、馬装表現が緻密であるのに対して、人物が極端に小さいことが指摘されている。このように人物が小さく表現された騎馬像は福島県清戸迫76号横穴の奥壁右端(2-29)にもある。中央部に一段と大きく描かれた渦巻文と繋がる人物像が被葬者像と目され、それに馬の頭部が接していることを重視すると、被葬者が冥界に連れて行く馬を描いた可能性が考えられる。大きな人物像の姿勢は馬を招き寄せる姿と見える。騎馬人物が小さい理由は稚児が描かれたものであろうか。数少ない騎馬埴輪にも同様の特徴が示されている。

また、岡山県新見市出土の須恵器の線刻画(2-24)に、軒や屋根の上に植物の枝を挿した二階家、その右側に房の下がったが旗が描かれており、家の左側には騎馬人物像がある。馬の尻は屈曲する線で二階家と繋がっている。辰巳和弘氏はこの家を軒に賢木を付けた喪屋、旗を挽旗と推定した上で、騎馬人物の頭部が蓬髪で顎鬚の表現を伴うことから、被葬者の霊魂を擬人化したものであろうと考えた。古代中国では鬼（死者のこと）は蓬髪裸身と信じられており、そうした信仰が日本に古くもたらされていたとする志田諄一氏の研究を参酌したものであるが、尊重すべき見解である。このことに対して、大阪府高井田横穴群第２支群第３号横穴の羨道左側壁、同第２支群23号横穴羨道左側壁、同第２支群28号横穴、安福寺横穴群10号横穴羨道側壁に描かれた線刻騎馬像(2-25)は人物が大きい。このうち安福寺例は長い筒袖の人物などとともに描かれており、描写・構図とも優れていることから渡来系絵師の関与が推定される。いっぽう、騎馬の鞍に旗が取り付けられた状態を示す絵が数例知られている。福岡県薬師下南古墳後室左壁に描かれたものは馬の倍ほどもある長い竿の先端に３旒の長い旗を取り付けたものであり(2-26)、同県五郎山古墳奥壁に描かれた騎馬像(2-27)には鞍の後ろに湾曲する竿があり、その先端に横長長方形の大きな旗が付いている。蛇行状鉄器といわれてきた遺物が埼玉県酒巻14号墳の埴輪の発見によって旗竿金具であったことが明らかとなった現在、朝鮮半島から騎馬用の旗が我が国にもたらされていたことが証明されたので、実際の有様を描いた図と考えてよい。また、青旗は万葉集によって挽旗であることがわかっている。このような旗を付けた騎馬図はほかに、大阪府高井田横穴群第２支群10号横穴、同第２支群23号横穴、同第２支群28号横穴の線刻壁画にも認められ、これらは葬送の様子を再現した絵画である可能性が考えられる。

2　狩猟と漁労の場面－猪・鹿・犬と魚－

(1)福岡県五郎山古墳の狩猟図(2-27)

福岡県五郎山古墳奥壁に描かれた様々な彩色壁画の場面を埴輪と対比して、共通するものであることを論証したのは小田富士雄氏であった。その対比資料となったのは埼玉古墳群中の前方後円墳で形象埴輪群のほぼ全貌が解明されていた瓦塚古墳であり、その配置復原を経て、各ブロックが巫女の執行する祭儀、琴弾きや踊り手からなる魂振りの舞い、殯屋を警護する武人や楯、口取りされ

る馬列、鹿を狩る狩猟場面などからなり、全体としては被葬者をモガリする古代葬送儀礼であったことを示したのは筆者であった。本稿では、逆に筆者が五郎山古墳奥壁の彩色壁画の主題解明に取り組んでみたいと思う。筆者が既に検討したところでは、狩猟表現はAからDの4場面に分かれ、騎馬または徒歩で弓を引いて猪や鹿を狩ろうとする場面が描かれている。しかし4場面に分かれているのは、その間に先行して描かれたと推定される靫の図文が介在しているためであって、本来は一つの大規模な協同狩猟図であるとみなすことが可能である。五郎山古墳の壁画主題について前著を要約しながら自説を紹介したい。狩猟表現Dの騎馬には緑色の旗が描かれ、これは挽旗の表現とみなすことができる。挽旗を標榜しながら狩を行っていることから、それが死者のために行われた狩であることがわかる。その狩を間近で見守る異形の人物像は被葬者の霊魂を表現したものである可能性が考えられた。狩猟表現Cを見守る女子像が左手に提げているのは狩猟の結果として得られた獲物の肉と推定される。この女子像は場面④にも描かれていて、跪いて喪屋にその肉を捧げようとしている。喪屋の前に立つ男子は魂振りの呪術を行っている。

また、場面⑦と⑨にみられる共通表現に、腰に左手を当て右手で手招きをする人物像があり、前方に大きな同心円文が描かれるが、それが獲物の直上に位置しているため、動物霊（マナ）を示したものと理解することができる。喪屋の中の死者に扶植する呪術が想定されるところである。以上のことから、五郎山古墳奥壁に描かれた壁画の主題は喪屋に安置された死者に肉を捧げ、動物霊を扶植するために挙行された大規模な協同狩猟であり、供犠のための狩とすることが可能であろう。なお、画面の隙間を埋めるようにしていくつかの珠文が描かれている。辰巳和弘氏は珠文を冥界の表現と捉え、壁画は来世においても被葬者が狩猟を楽しむことができるように希求して描かれたと理解した。しかし、白石太一郎氏はこうした表現は高句麗壁画の影響ではあっても、その思想が理解されて描かれたものとは言えないと説いている。筆者は、この壁画が現世において喪屋の周辺で挙行された狩猟を描いたものであることが明らかなため、辰巳氏の見解に従うことはできない。

(2)福島県泉崎4号横穴墓の狩猟図(2-28)

奥壁に描かれた主題は4人の勢子を伴って行う騎射の鹿狩の場面と供物を捧げ持つ3人の女性で構成されている。供物はその鹿の肉であろう。したがって、狩猟図と女子像は因果関係があり、時間的に連続する事象を一つの画面に描いたものと推測される。このような異時同画技法は前述した五郎山古墳にも認められたところであった。五郎山古墳に比べれば簡素な表現ではあるが、死者のために行う供犠のための狩猟が共通して描かれていたといいうる。壁画の下部には横方向に展開する珠文が多数描かれている。

(3)福島県羽山1号横穴墓の狩猟図(3-39)

囲いのある狩場(禁園)で4人以上が行う共同狩猟がこの壁画の唯一の画題であり、獲物は赤と白で描き分けられた2頭の鹿である。消失した中央部画像は騎馬の射手であったと推測される。画面全体に赤と白の珠文が散在しており、星辰を表したものとすれば高句麗壁画の影響とすることができよう。

(4)福島県清戸迫76号横穴墓の狩猟図(2-29)

壁画の主題は二つある。ひとつは中央部下段から左側に展開する構図で、狩猟場面とそれを見守る被葬者のひとがたに描かれた霊魂である。したがって死者に供犠する目的で狩が行われたことが知れる。もうひとつは中央部上段から右側に展開する構図で、騎手の乗る馬を招く被葬者のひとがたの霊魂である。二つのひとがたは服装と被り物が一致しており、同一人物であることが示されている。渦文はここでは冥界を象徴しており、これと繋がることによって他界する被葬者の霊魂が愛馬を冥界に連れて行く様子を表している。

(5)その他の狩猟図

線刻壁画で狩猟場面が描かれたものは東北地方南部に何例か存在している。福島県船着横穴には

四足獣を４人で狩る協同狩猟が示されている(3-38)。この四足獣はあまり写実的なものではないが、背中に鰭状の蓑毛を表現しているので猪の可能性がある。２人の勢子が前方から駆け寄り、その少し前方に弓を番える狩人がいるが、とどめを刺しているのは獲物の斜め後方にいる狩人で、槍を背中に突き刺している。この狩猟場面の左側には他の人物と異なって手足の表現がなく、杓子形の異形の人物像が描かれている。大きさも他の人物に比して格段に大きい、被葬者の霊魂を示したものであり、狩猟の様子を見守っている姿と考えてみたい。

福島県大窪横穴群中の１基から四足獣の前方から弓を放つ狩人の線刻画が発見されている。四足獣は脚部が長く、耳の形状からも雌鹿を描いたものらしい。

彩色壁画のある福岡県瀬戸横穴墓群第14号横穴墓玄室東壁には雌鹿の背後から矢を放とうとする狩人が描かれている(2-30a)。膝から上部が大きく膨らむ衣褌を着用し、三角形の編み笠を被っているように見える。興味深いのは玄室西壁に描かれた刀を抜いて右手に持つ人物と馬の組み合わせ(2-30c)である、馬の殉殺風景となる可能性がある。

⑹千葉県長柄第13号横穴墓の漁労図(3-31)

漁労図は例が少ない。長柄第13号横穴墓の奥壁いっぱいに描かれた線刻画はパノラマふうの構成で重複が少ない。報告書では中央部の三角形の構造物を竪穴住居かとするが、これは四つ手網である。下部に斜格子の網目が表現され、上部には竹か木で拵えた骨組みがあり、それらが交差する頂上には結束するための要が表現されている。この四つ手網の向こう側には両手を広げてこれを操る漁師の姿が描かれている。網の中には魚の姿はなく、これから網を入れようとする状況を示したものかもしれない。四つ手網の近くには蓮の蕾とみられる表現があり、７羽の水鳥らしき首の長い鳥が魚を捕食するような姿勢で描かれている。湖沼の水辺の環境が丹念に描写されたものと見て差支えないであろう。これらの上部には４層の屋根を持つ望楼らしき建物と２羽の鶏の正面図が描かれており、集落の一部が描き込まれているとみられる。

画面左端に杓子形の顔が縦方向に二つ重ねて描かれている。頭髪の表現がなく、表情は温和である。漁労の様子を見守る被葬者たちの霊魂を表現したものであろう。四つ手網で捕獲される魚はその死者に供えられるべきものである。したがって、画題は日常風景ではなく、供犠のための漁となる。

３　人物の呪術的な表現と祖霊像

⑴四股踏みをする人物画(3-32)

千葉県千代丸・力丸横穴群第12号墓には奇妙な人物線画が２つある。ともに股を割って大きく開き、爪先が外側に向く。いわゆる蟹股の状態である。また手は脇に下げ、手のひらを外方に開く。この特異な姿態は力士の四股踏みや神楽田力男、猿田彦のヘンバイに見られるものと共通している。相撲が鎮魂と深い関係があることは百済大使尭岐が来日した時、息子が頓死したので、健児に命じて相撲を取らせたという日本書紀の記事から窺うことができるが、葬事を掌る土師氏の祖である野見宿禰が相撲の達者と伝えられることにも示されている。また、四股踏みをする力士埴輪が福島県原山１号墳から出土しているように、古墳時代には既に葬送儀礼に相撲が組み込まれていたことを知ることができる。とくに四股踏みやヘンバイと呼ばれる地摺りの足使いは中国古代の「う歩」と同じく鎮魂の呪術であったと考えられている。

したがって、壁画に描かれたのは死者の鎮魂の呪術を示すものとみて差支えないであろう。

⑵蓬髪の人物画

線刻人物画では頭髪表現を欠く坊主頭の人物が多い。しかし、大阪府高井田横穴群においては、第２支群12号横穴、第２支群27号横穴、第３支群５号横穴、第４支群７号横穴(3-33)に坊主頭の人

物に混じって、放射状に逆立つ頭髪を表現するものがある。これらは当時の美豆良を結ったり、つぶし島田を結ったりする習俗に反し、髪を伸ばしっぱなしにしてあえて結わない様を示している。髪を結わず、身なりを省みないのは魏志倭人伝に登場する持衰の様に共通している。また、古代中国においては鬼（死者の霊魂）は蓬頭で裸身と信じられていたという。

ところで、これらの蓬髪の人物たちは描かれた大きさや位置から壁画中の中心人物とはならず、むしろ脇役であるという共通点を有している。例えば、舟を漕ぐ人物の一人は辰巳和弘氏が考えるように持衰として差支えないであろう。しかし、船と無関係なものについては、蓬髪が仙人など、物忌みする人々の身体表象であることを想起するならば、被葬者の喪に服す喪主の姿を描いたという新しい見方も可能であろう。

べつに蓬髪の人物の頭部だけを描いたものに千葉県千代丸・力丸横穴群第25号墓の左側壁天井部に描かれた例(3-34)がある。こちらは他の人物像よりも大きく描かれていて、別の解釈が必要となる。死者を表したものかもしれない。

ちなみに、茨城県猫淵横穴群9号墓の人物は蓬髪で口髭と顎鬚があり、目をむき、歯を示すなど、憤怒の形相が見事に描かれている。しかし、手に持つのは先端が菱形となる短剣であり、不動尊の表現と似ている点は看過できない。横穴墓は7世紀に比定されているが、この壁画を当初のものとするのは無理であろう。

(3)身体を省略した顔の画像

身体を省略して頭部のみを描く線刻画は九州では宮崎県、関東では神奈川県、東京都、千葉県に分布している。宮崎県では広原1号横穴墓、蓮ヶ池53号横穴墓などに例があるが、小さな図が群在する点に共通項がある。前者は髪と鬚の表現を欠くが、後者は顎鬚を伴うものが多い。また後者のばあい、船の絵に接して7つの顔があることから、船に乗って冥界に赴く被葬者の霊魂を描いた可能性がある。その場合、同時に描かれたとするよりも順次描かれたとする方が実際に即していることになろう。

これらに対して、関東地方の横穴墓の顔は奥壁の中央部などに大きく描かれ、群在するものと、単体のものとがある。複数描かれるものは神奈川県庄ヶ久保横穴群第8号墓(3-35)、東京都不動橋横穴墓群第11号墓、千葉県源六谷横穴墓群第6号墓(3-36)・同7号墓、千葉県千代丸・力丸横穴墓群第14号墓・同25号墓である。

これらのうち庄ヶ久保横穴群第8号墓のばあい、玄室奥壁の上段に一際大きな顔が3つ並び、その右側にも小さな顔がある。中段には中くらいの顔が1つ、下段にも中くらいの顔が1つあり、合計では6個の顔がある。大きな顔は仏像であって三尊像の型式をとるとする意見があるが、額に白豪がある訳ではなく、耳たぶの長い耳も描き込まれていないので仏像と見る根拠は薄いように思われる。この大きな顔の下には垂線が2本引かれており、下端部は鍵状に曲がっている。これを仏具と見る意見もあるが、後述するように大きな顔に伴う足の可能性が高い。おそらく3つの顔に2本ずつ、計6本描かれた内の2本が現存しているのであろう。

大きな顔を玄室中央部などに単体で描く例としては、神奈川県早野横穴墓、同県王禅寺白山横穴群第1号墓、同越の山横穴墓群第2号墓がある。いずれも頭髪の表現を欠き、表情が温和である。このため仏像の可能性が説かれている。しかし、庄ヶ久保横穴群第8号墓のばあいと同様に仏像とする決め手を欠いている。これらの顔の正体は千葉県源六谷横穴墓群第6号墓の線刻画(3-36)に示されている。胴体のない顔が逆さまに2本足でぶら下がっているのである。これらの大きな顔には胴体を伴っていないのである。当然、人間を描いたものではない。しかし面相が穏やかなため、墓を護る僻邪とすることは不適当である。また、霊魂を描いたとするにも、他界への葬送の様子を伴わないことに難点がある。複数並列する場合があることからも、おそらく霊魂が他界に赴き、年を

経て祖霊となった姿を示したのであろう。

この異形の祖霊のイメージは日本書紀と肥前・豊後・常陸・摂津・陸奥・日向風土記に登場する土蜘蛛伝承の源であったのではないか。身長が低く手足が長いという土蜘蛛の身体的な特徴はこれらの図像と重なり、逆さまの表現は蜘蛛の生態と完全に合致している。また、土蜘蛛を穴居民と伝えるのは横穴墓の主であったからに違いない。こう考えると、まつろわぬ民が横穴墓と繋がっていることはたいへん興味深い。

(4)森の中に描かれた異形の人物像

大阪府高井田横穴群第1支群5号横穴墓奥壁の線刻壁画(3-37)は背景に5個の木葉文を横並びに描き、その前面に達磨状の異形の人物を置いている。顔はその外郭線とは別に中心部に小さな輪郭を持ち、顎鬚と頬髯の表現がある。手は枝状の線画で雪達磨を連想させるが、線画の両足を伴う点で雪達磨とは異なっている。この人物像は木葉文と重複せず、計画的に配置されていることから、後世の戯画の可能性は低い。

また、描かれた位置と大きさからして、この壁画中の主題と目される。筆者は森の中にある被葬者の霊魂を示したものと推測する。構成のよく似た線刻壁画に鳥取県米岡2号墳の例がある。多数の綾杉文に囲まれた中央部に両手をひろげて立つ人物図があり、頭部は円形で頭髪や鬚の表現は伴っていない。この古墳に描かれた唯一の人物像であることから、やはり森の中にある被葬者の霊魂をひとがたに描いたものと類推される。頭部に重複して倒立の木葉文が描かれているのは姿を隠す意味合いが篭められているのかもしれない。これとよく似たモチーフは神奈川県堂後下横穴墓群第9号墳にもあり、多数の綾杉文が描かれ、そこに隠れるようにして佇む人物像がある。このように、森の中に描かれた霊魂の図は類型化が可能となるかもしれない。

まとめ

古墳壁画に描かれた動物には鳥、馬、猪、鹿、犬、魚があった。こうした動物たちは日常風景の中でその生態が描かれているのではなく、墓主の葬送儀礼と関係して描かれていることを指摘した。とくに狩猟場面と漁労場面は死者に供犠するために挙行された共同体の特別な狩猟を表現しており、そこには供物を喪屋に捧げる巫女、動物霊を招き寄せる呪術者、さらには狩を見守るひとがたの霊魂までが描かれていた。

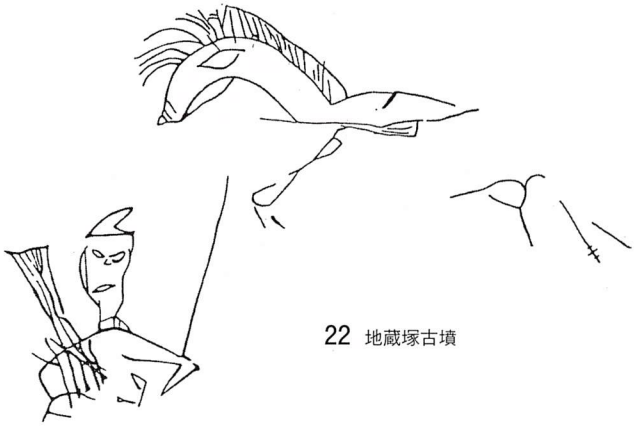
いっぽう、人物像の検討においては、胴体がなく逆さまに天井からぶら下がる異形の人物像を祖霊像と考え、土蜘蛛との関係にもふれた。また、森の中に描かれた人物像は他界した霊魂を示すものと考えた。あらためて、古墳壁画が日本人の死に関する基層文化を封じ込めたタイムカプセルであることを再認識した次第である。

主な引用文献

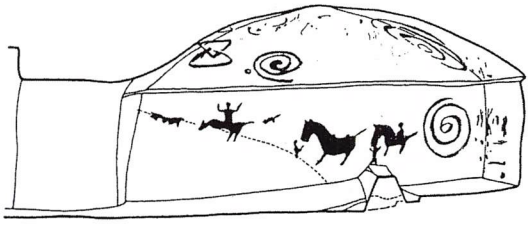
小林　行雄　『装飾古墳』　平凡社　昭和39年
金井塚良一　「東日本の線刻画」『埼玉県立博物館紀要』8・9号　昭和58年
日下　八光　『東国の装飾古墳』　雄山閣出版　平成10年
辰巳　和弘　『埴輪と絵画の古代学』　白水社　平成4年
白石太一郎ほか　『装飾古墳の世界』　国立歴史民俗博物館・朝日新聞社　平成5年
小田富士雄・武末純一　『国史跡 五郎山古墳』　筑紫野市教育委員会　平成10年
埋蔵文化財研究会　『装飾古墳の展開』資料集　平成14年
若松　良一　「古墳壁画の狩猟図について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』創刊号　平成19年

1 幡横穴
2 幡横穴
3 白河内古墳
4 地蔵塚古墳
5 地蔵塚古墳
7a 空山古墳
6 観音堂3号横穴
8 鬼塚古墳
7b 空山古墳
7c 空山古墳
9 珍敷塚古墳
10 鳥船塚古墳
0 50cm
11 弁慶が穴古墳
12 珍敷塚古墳
13 洗馬谷2号横穴
14 地蔵塚古墳
15 幡バッケ6号横穴
0 2m
16 高岩18号横穴
17 唐古・鍵遺跡
0 2m
18 梶山古墳
19 空山15号墳
0 20cm
20 鷺山古墳
21 外部田谷横穴

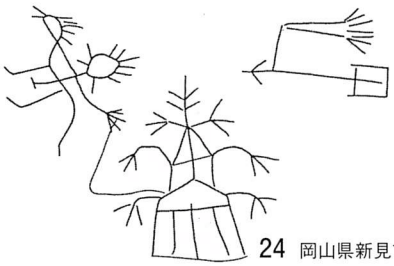
挿図1　古墳壁画集成1



22 地蔵塚古墳

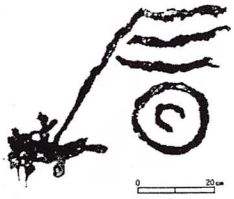


23 泉崎４号横穴

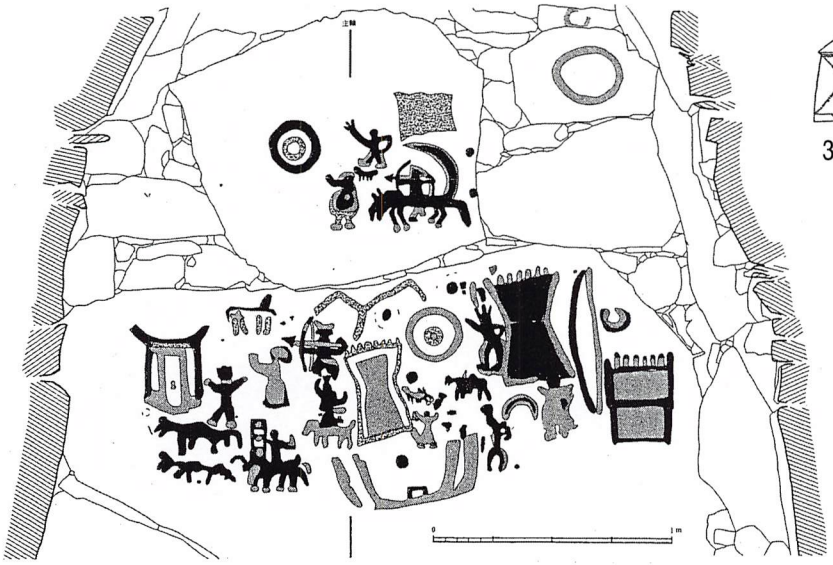


24 岡山県新見市出土須恵器

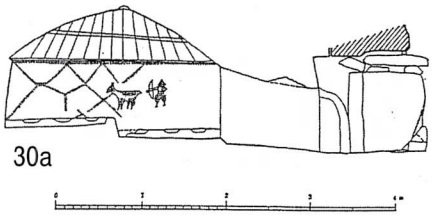
25 安福寺10号横穴



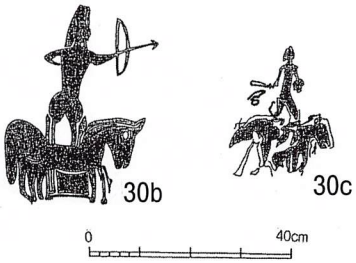
26 薬師下南古墳



27 五郎山古墳

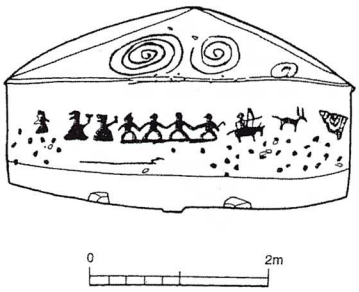


30a



30b　30c

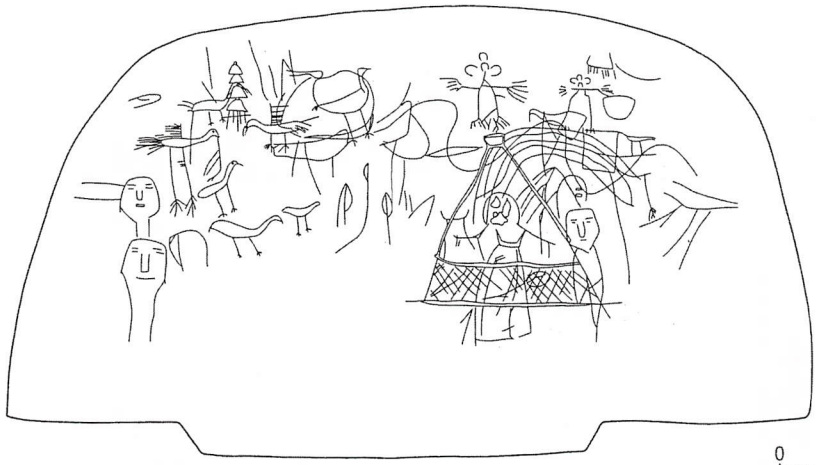
瀬戸14号横穴



28 泉崎４号横穴

29 清戸迫76号横穴

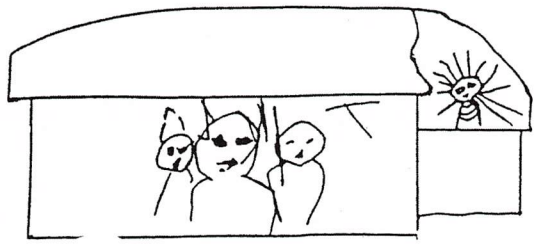
挿図２　古墳壁画集成２



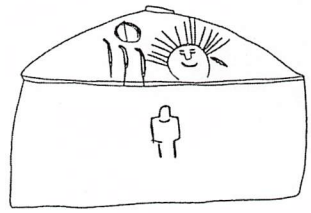
31 長柄13号横穴

0 1 m

32 千代丸・力丸横穴



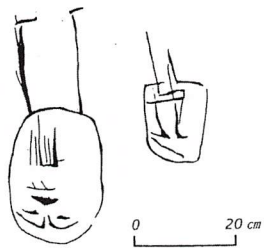
33 高井田山4-7号横穴



34 千代丸・力丸25号横穴

0 50 cm

35 庄ヶ久保８号横穴



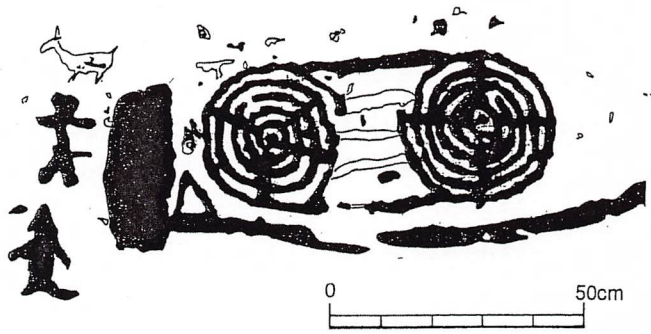
0 20 cm

36 源六谷６号横穴

37 高井田山1-5号横穴

38 船着横穴

39 羽山１号横穴



0 50cm

挿図３　古墳壁画集成３